

幼児の豊潤なる感性

秋山 泉

SUR LA SENSIBILITÉ RICHE DANS DES ENFANTS

Izumi AKIYAMA

(Réçu Octobre 1.1998)

キーワード：感性・抽象・自由・立体化・概念・刺激環境

はじめに

1993年4月～97年3月まで附属幼稚園の園長として4年間、子どもたちとの係わりの中で出会った場面の中に豊かな感性を示す沢山の例証を得た。その極く一部をここに取り上げてみる。ところで感性について広辞苑をひもといてみると次の3つの解釈がなされていた。①外界の刺激におうじて感覚、知覚を生じる感覚機能の感受性。②感覚によって呼び起こされ、それに支配される体験。従って感覚に伴う感情や衝動・欲望をも含む。③理性によって制御されるべき感覚的欲望。

I 人間としての感性の存在

1. 消防自動車

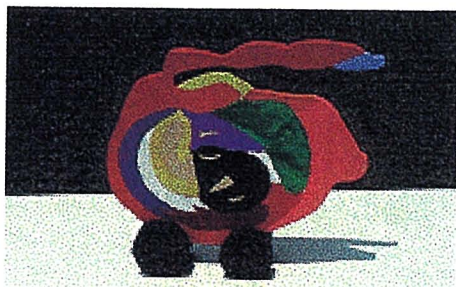
ある日、一人の3才男児が下図のような設計図を描いてきた。それをコピーして色も付けてもらう。設計図とは大げさであるが子どもたちがその重要さを自然に意識していくようにという配慮からこの言葉を使った。まず2cmほどの厚いほうの木のの上にカーボン紙を



使って鉛筆で写し、電動糸のこで切り取る。次にアクリル絵の具で原画の色を忠実に再現するように塗る。裏側も原画を反転して写し同様に行う。全く同じにはできないが限りなく原画に近づける。本体が出来上がったところで車輪を4つ釘で取り付ける。この車輪はころころと回転して動く。

色の付いた原画に従いながら本体に写されている形の中に色を比較検討しながら慎重に丁寧に彩色筆で塗っていく。その操作の繰り返しは不思議な面白さを与え始めた。自らが描いているにもかかわらず目に見えない彼方から何かがゆっくりやってくるようなある感覚を持った。最初、それが何であるか分からなかった。作業が進むにつれて次第に心がときめき、やがて完成した時には感嘆の叫びとなった。設計図が持っている内容が目に見える姿となっははっきりと現われたのである。胴体部において暗い重い色が下方へ、中心より外周及び上方に向かって明るい色が配色されているのである。車輪の黒色は大地をがっしりと捉えている。卵型の黒色は茶色を間に入れて車輪の黒色と連動して大地に連なる。中心の黒色を囲むような緑色と紫色は甘美で深く静である。突如、黄

色が中心から天に向かって突き進む。それに呼応して赤色が爆発する。卵宇宙のような形態は中心部から外縁部に向かって、暗から明へ、鈍から鋭へ、穏やかさから派手へと連なる。しかもそれら全体の色彩の世界は黒色の車輪で大地に接し、しっかりとその上に立っているのである。なんと確固とした存在であることか。色彩と形態は非常に動的でしかも全体的に調和が損なわれていない。幼児の図をもとに大人の手がなぞった表現ではあるが



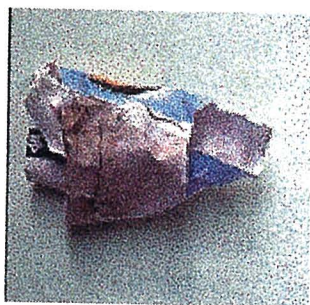
べールで覆われて一部の人にしか見えなかった幼児の感性の世界に対して、上のような操作はそのべールを取り去ったともいえる。この形態と色彩の構成の世界は宇宙的な世界とも類似するような世界をも垣間みさせてくれる。この形態は消防自動車であるという。幼児の驚くべき感性の存在の左証である。



フランク・ステラの作品に同心正方形というアクリルで描いた絵がある。外縁部は暗い紫色、黒色、暗い青色、灰色、緑色そして中心に向かって赤色、黄色になる。外側から内側へ正方形の形態は大から小へ、色調は明から暗へ、穏やかな色から派手な色へと目は移動する。上述の3才男児の構成は卵宇宙のような有機的形態であり内から外への運動を内包し、このステラの構成は正方形という幾何学的形態で外から内へと運動する。双方内から外、外から内への違いがあるものの底に流れている感覚は類似している。大人の深い思考と目

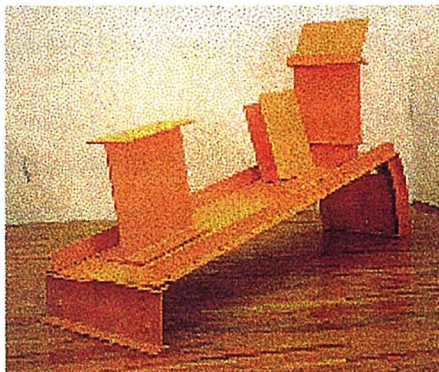
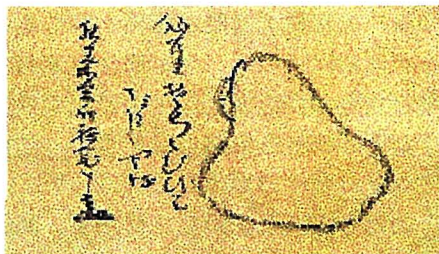
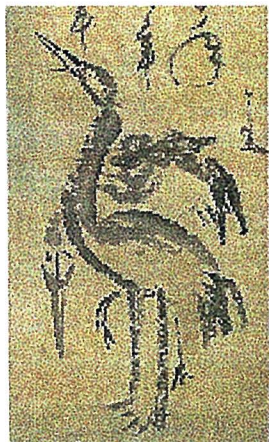
には見えないが感覚によって生まれた何かとが一体となって生まれたステラの芸術作品、感覚だけで生まれたと考え易い幼児の作品の共通の地盤は何であろうか。複雑な原語を操ることのできるステラ、幼児にはそれはまだ育ってはいない。しかし大人と子どもという差はあるが五体揃った人間であることには変わりがない。人間が外界を感得する感覚の一般原則のような、ある普遍的な何かの存在を思わずにいられない。

2. つる



下図は3才女児が遊びの中で作った形態である。彼女はこの形態を「つる」という。この言葉を耳にした時、写実的なあるいは具体的な要素の全く含まない形態と大人がつるといふ言葉から連想する写実的な形態との落差に理由は分らなかったが何か不思議な思いがし、その形態に興味を抱いた。この時、幼児は見立てをするものだという判断をこの状況に当てはめて通りすぎてしまうことのできない何かがあるよう思われた。

ここに図鑑に載っているつるの姿がある。我々がつるというとき頭の中に思い浮かべるのはこのような姿かあるいはそのヴァリエーションであろう。また江戸時代後期の禅僧で



ある仙崖の作品の中に双鶴画賛という絵がある。この絵を見てみると足は棒杭のようであり頭と首は離れ羽は墨の単なるぬりたくりのように見える。図鑑のつると比べはなはだ不正確である。つるのようであるがつるでない。ではつるではないかと

言われればつるのような思いもする。もう一つ仙崖の作品である自画像画賛という絵では下部のややふくれた線描が目につくのみである。絵の中に書き入れてある賛を読んで見る。`仙崖そちらをむひて なにしやる`とある。ここで仙崖が後ろ向きに座っているのだということが理解できる。賛の言葉を読まなければ人は何が描かれているか分からないであろう。とても下手であると思ったりする。

アンソニー・カロの彫刻に正午という黄色を着色した鉄の作品がある。これを最初見た時、題名と彫刻作品とが結び付かずその意味はわからないであろう。3才女児のつるという言葉と彼女の作った形態との落差にとてもよく似ている。カロの作品をもう少し検討してみよう。すべり台を思わせる形の上に3つの形が立っている。低い位置には斜めの台の中央に垂直に、高い位置には斜めに傾いた形、最上部には傾いた細長い形が立っている。一つ一つの形を低い位置から少しづつ見ていくと次のようなことが感じられた。彫刻を支える床は大地、そこから見る人の気持ちは立ち上がって斜め上に進む。最初の手前の形はそのような斜め上方への気分をより強くする。次の形は傾くことによってその気分を大きく豊かに膨らませ、最終の形によって広々とした大空へ向かう。大地から大空へ飛び立つような壮大な感じを理解する。黄色も拡散、膨張する。大地から大空へ、朝日が昇り正午太陽が天空の最も高いところに至る自然の営みを輝くような昂揚した気分として表現している。大自然の一部をそのように捉えていると理解したとき、この彫刻を見る者は新たな心の充実感を得ることができる。

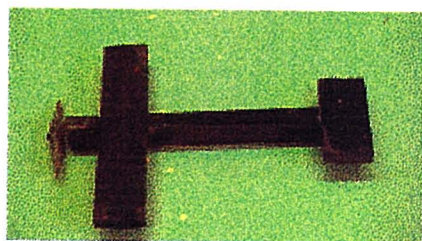
正午という言葉の意味する具体性はカロのこのような抽象的な形態に宿る。`つる`という言葉の意味する具体性も3才女児の作った抽象的な形態に宿る。仙崖のつるも自画像

も抽象に近づいているがまだ具体性を残す。具体性と抽象性はお互いに行き来する。程度の差はあれ、そこに存在する共通のものは自由さではないだろうか。枠にはまった決まりきった形では動きがとれない。枠にはまらない自由さに注目したとき、俄然3才女兒の「つる」の形態の意味が燦然と輝くものとして意識に上がってくる。あの形態が魅力的であった理由は「つる」の形態に含まれている自由さにあったと気付く。「つる」が大地から飛び立ち大空を巡回して飛び立つ様はまさに自由そのものを我々に感じさせてくれる。3才女兒の作った形態にはそういった自由さがある。彼女がその形態を指さして「つる」と言ったときその形態と意味は一致する。

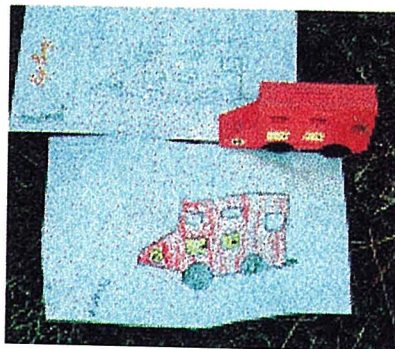
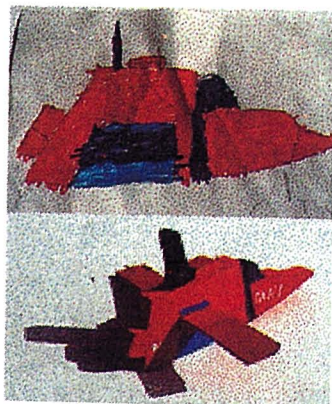
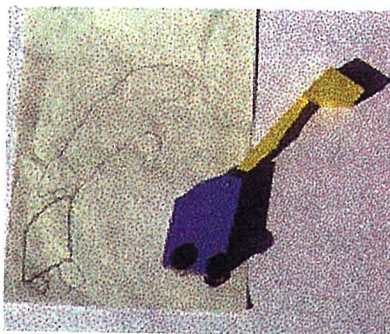
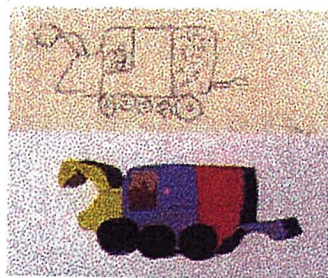
幼児と大人とを対立させ上下、高低で見る視点は双方に共通の感覚の存在が理解できれば消える。幼児であろうが大人であろうが共通に流れている感覚、感性の存在を思う時、それは人間であるという共通項を思わざるを得ない。

II 感性の跳躍

子どもたちの設計図の注文によって多くの小さな木の工作が生み出されたが下図は最初の記念すべき木の飛行機である。これは子どもたちと一緒に製作したもので棒材を鋸で切る、釘で翼を止める、色を塗るといった作業の中から切り方、打ち方、塗り方、金槌の持ち方、身体の位置、後輪末等、必要にせまられての自然なかたちで子どもたちに伝わった。木工作には三つの流れが生まれた。

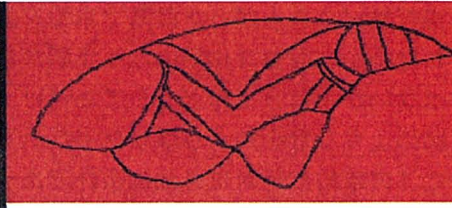
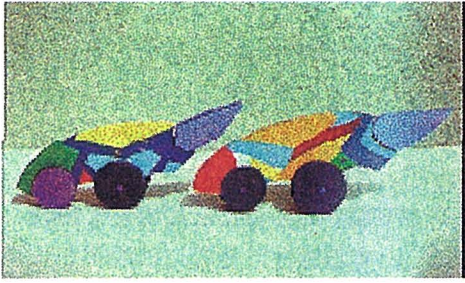


1. 子ども自らが設計図として描いてきた形



左図の上段が設計図である。作った工作物が下段である。アクリルで彩色してある。

右上段はショベルカーである。設計図は鉛筆で半紙に一本の線描で描いている。右下段は鉛筆だけの設計図とそれをコピーしたものに色を塗った色彩設計である。これらは5才男児のものであるが自ら描いた平面図が立体になって手に持てることの意味深さを思う。

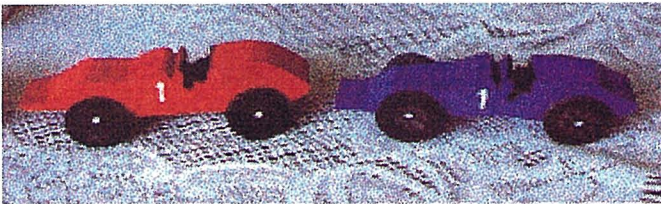
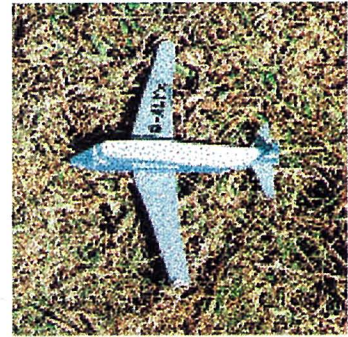


5才男児の
設計図とそ
の立体。

胴部の配色は子どもたちによって様々なヴァリエーションの色の組み合わせが生まれた。

2. おもちゃ図鑑から子どもたちが指定し選択して生まれた形

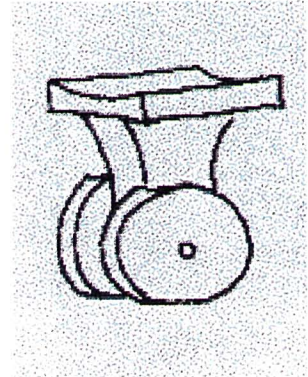
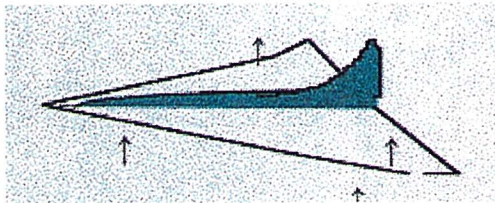
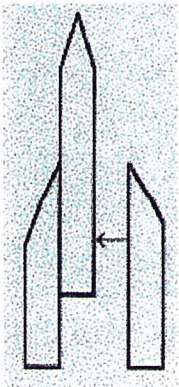
MENTAL TOYS Salamander Book 1984 LONDON の中には楽しいおもちゃの写真が一杯詰まっている。ページをめくりながら子どもたちに好きな形を選んでもらう。自動車、飛行機などその興味と選択は明快である。



左図の自動車の色は図鑑とは異なり子どもの指定した希望の色である。

3. 子どもたちが口頭で述べることから生まれた形

ロケットを作ってほしいという口頭での注文から棒材を15cmほどに切り、先を尖らせて完成とした。ところが翼を付けることを執拗に要求してきた。そのため下図のような翼を付けた。付けた感じは一本のペンシルのような形よりもはるかにロケットらしくなった。

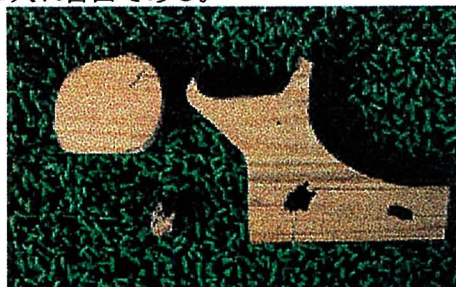


また三角翼の飛行機ができ上がった段階で車輪を付けることを要求してきた。それも四ヶ所である。それは細かい面倒な作業になる予感がありできれば避けたい仕事であった。これでいいのではないかと言ってもどうしても付けて欲しいと強く主張する。そこで上図の矢印四ヶ所に図のような形をつくり取り付けた。車輪は8つを要した。付けてみると現実感があり確かにこの車輪は絶対に必要な条件であったことが分かる。

翼のない胴体、車輪のない飛行機の胴体、それを見て不満を感じることでできる感性、そして両翼の付いたとき、車輪が幾つも付いた時に良しとする感性、そこには現状からより高い場に飛躍しようとする感性の在りようをみることができる。

III 豊饒なる感性

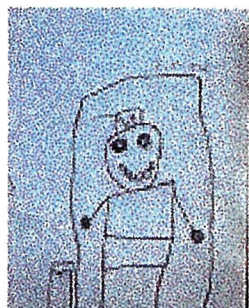
1. 設計図として下図を描いてきた4才男児がいた。描かれた形の意味を聞いて一瞬戸惑う。この抽象的図は地球、星、土星であるという意外な返事である。手ごろな板の切れ端を選びカーボン紙を使って鉛筆で写す。次に電動糸のこで切り抜く。抜き取った形はもとの板にはめ込むことができる。板の厚さがあるので米粒のような形でもしっかりとしており、もとの板にはめ込む時、味あう感覚が面白い。円の切り取られた形ももとの場所に置くことができる。星も土星も出し入れ自由である。



しばらくして星を落としてしまったということなので同じものを作って渡した。

地球、星、土星を手のひらの上に形として存在させ自由に扱う感覚は壮大で巨大なものに連なる意味深いものを内包しているように思う。

2. 下図はスーパーマリオとドアという設計図である。この設計図を与えられた時にはどのように作るべきか迷う。思いもかけない形はそれだけ魅力のあるものだという事は後に分かる。たまたま厚めの木のブロックがあったのでこれにカーボン紙で形を写す。電動



いとこのこで切り抜いた。(右図) スーパーマリオとドアを切り離した時その出入りに不思議

な面白さが生み出された。マリオが階段状に前面に飛び出す。あるいは押し込む。その操作は妙に現実感があり笑いを誘い、楽しさを生み出す。



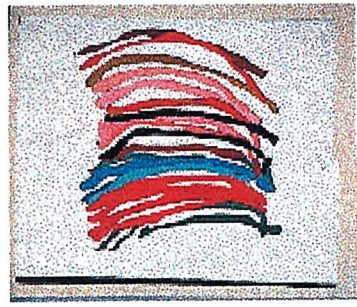
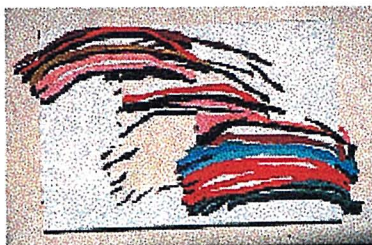
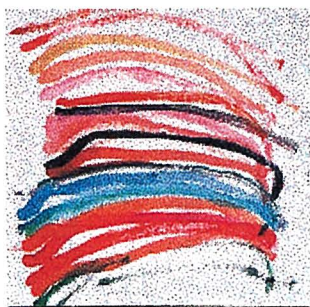
3. 年中組の壁には色々と子どもたちの絵が貼り付けてある。しばらく眺めていくとその中の一枚に引き付けられた。その理由が何であるかその時は分からなかった。4才男児の絵である。厚さ3cm

18×19cmの正方形に近いほうの木に切り抜いた。各パーツは原画の色をできる限り正確にアクリル絵の具によって再現する。それぞれの形は手前に出したり奥へ引き込ませたりすることができる。

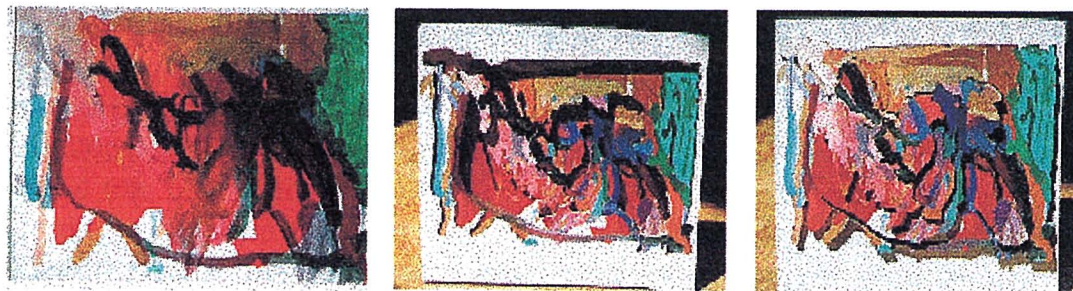


ここに見られるのは全くの抽象である。この抽象形を実際に手に持って出したり入れたり
の操作をすると不思議な面白さと何か豊かな気分を感じさせてくれる。一枚の平面的な絵
(左) が立体になることによって (中央・右) 絵に内包しているものがよりはっきりと現
われたとも言えよう。形態と色彩は変化があり動的で同時に調和がとれている。自らがパ
ーツを動かすことによってそのことを強く実感する。そして幼児の豊かな大きな生命力の
存在に気付くのではなかろうか。

4. これも4才女児の絵である。原画をやや縮小して9mmの合板に写し4つのパーツに切り抜く。各パーツは出し入れができる。沢山の曲線は立体化された。明るい暖色のヴァリエーションの中に貫入する青と黒っぽい色の形態と色彩の美しさがより一層理解できる。

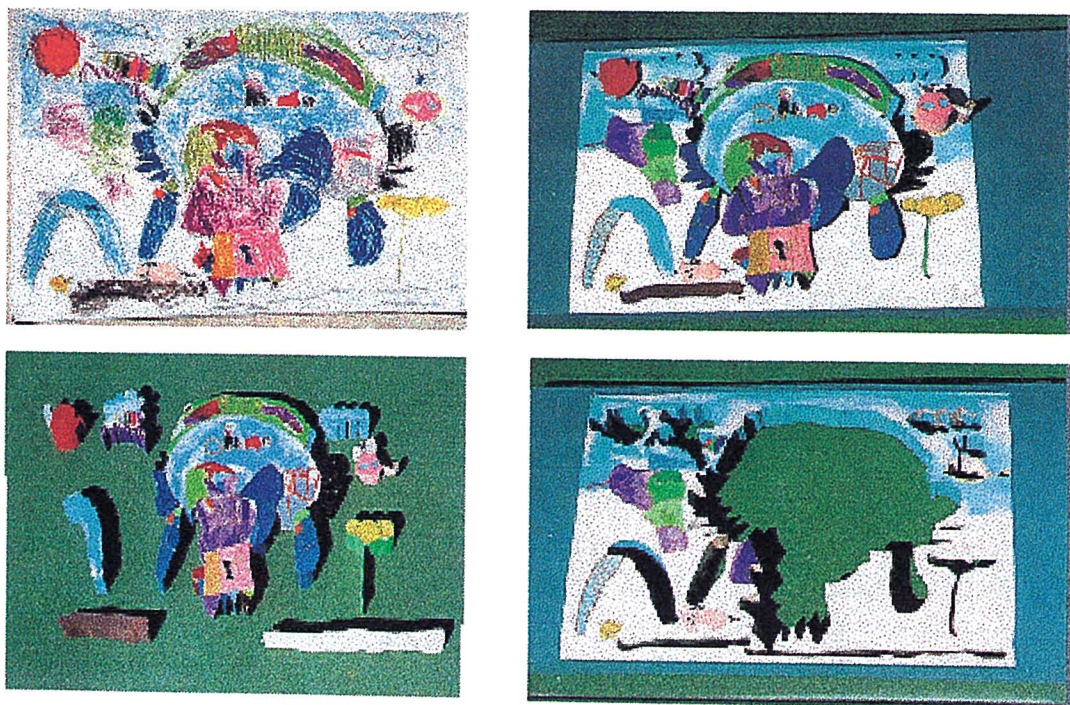


5. 4才男児の絵である。強烈な赤色を中心とする暖色の中に緑色を背後に従えて貫入する動きのある線状の青色、暗色がそれらと対照して迫力があり美しい。立体にすることによって形態と色彩の複雑さが明らかになってくる。しかもその複雑さには一定の法則があ



り統一と調和がある。大人は子どもが単にでたらめにぬりたくったものとは思わないだろうか。大きな色面から小さな色面へ、大まかさから細かさへ、強い色調から弱い色調へ、下方左の隅の塗り残しのように見える白い明るさと彩色部分との軽重関係。安定的な緑色から噴き出すような赤色。左横隅の縦に引かれた目の覚めるような青色の赤と緑色との対照など論理的関係が形態と色彩にある。立体化は絵に内包されているものの密度の濃さや重さをあらためて実感させる。そして幼児の絵の中に隠されていた澁刺とした華やかな明るさを伴った上昇のエネルギーを我々に意識させてくれる。

6. 3才男児の絵である。宇宙船のような不思議な形態は自分の家と庭を描いたものである。厚さ3cm 53×26.8cmの板に絵を写して9つの形を切りぬいた。



絵全体からは暖かな雰囲気のみならず人を幸福に誘い込むような気分がある。立体化する過程で幼児が自らを取り囲む環境への認識の鋭さ、複雑さ、その重要性を理解させてくれる。1. ~6. まで子どもたちの絵を立体化する過程を通じて彼等の豊饒な感性の世界を深く肉化する状態で理解できたように思う。幼児のともすれば見捨ててしまいがちな、あるいは理解できないと思われる描画の中にきらめくような原石にも似た存在があることを時間の掛かる手仕事の立体への再現を通じて認識することができたように思われる。

IV 概念を越えて

子どもたちは自分の好きな印刷の絵を持ってきてその絵の写しを求める。2 B鉛筆で大きく写した絵は原画として手元に置きコピーしたものを渡す。しかしこれは高価につくので本人に原画を写してもらおう方向に進んだ。子どもたちは写し絵をしたいと言い、写し絵という名称を自然に使い出した。この時期はプロ・サッカーの発足にあたり各リーグのマスコットの絵が男児には人気であった。またアニメやテレビゲームのキャラクターも好んだ。女兒はセラームーンの写し絵をよくやった。

小さなメダルやカードに描かれた絵を鉛筆で写しコピー機でB 4判に拡大する。この原画と薄いしっかりした紙を写し絵をしたいという子どもに渡す。高さ20cm 50×100cm ほどの箱がある。上にくもりガラスが張ってあり中に3本の蛍光灯が点灯する。この上に原画を置き薄い紙を重ねて左手で二つの紙がずれないように押さえつつ2 B鉛筆で写していく。後述するがこの時押さえ方の不注意からずれを起こすことがある。しかしそれは新たな世界への発見に通じていた。

子どもたちはこの写し絵が大好きになった。彼等が生み出す線質は何れも異なるがそれぞれすべてが下図4枚の例に見られるように生き生きとした豊かさを持っている。



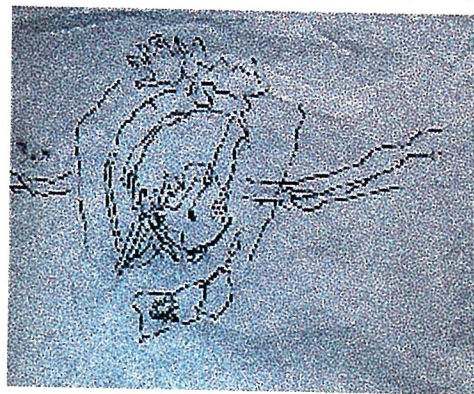
左・原画



左・原画

ある時写し絵をした一人の5才男児が自分の写した絵を見せて「正確？」と尋ねてきた。それは一本の輪郭線で描かれた原画に比べると部分的に何本ものずれた線があった。とっさに返答に躊躇した。正確という言葉の意味を原画にそっくりという意味ならば正確ではないと言える。しかしこの5才という年齢段階で正確でないと否定し対象の形態にそっくりになるように求めることの危なさを思った。勿論、否定し軌道修正することは様々な場面で必要な当然なことではある。このことがきっかけで以下のことを考えさせてくれた。

アルベルティ・ジャコメッティのデッサンの表現方法は複数のとぎれとぎれの線が対象の周囲をぐるぐる回る。例えば下図左の静物デッサンである。室内、テーブル、皿、リンゴなどが描かれている。輪郭線は対象が何であるかを外形で人に理解させる。人に説明するためにはとても都合がよい。一方リンゴが皿の上に実際に存在しているような感覚、現実の部屋の中とそこに置いてあるテーブル、その皿の上に盛られたリンゴがそこにある感覚を表現することは一本の輪郭線ではなかなかむずかしい。ジャコメッティはそのような存在感を表現するためにとぎれとぎれの重複するかのような線を使用した。



上・原画、右4才男児の写し絵である。髪の毛の重複がはっきりと分かる。人はこれを見て不正確というであろう。しかし髪の毛の量感はどうであろう。こちらの方がはるかにある。

左の5才女児のセーラーームーンの写し絵にはふるような振動する線がある。この重複する線に実際の動きを感じることも可能である。

上左が原画で右がその一部を写した5才女児の写し絵である。

しかしこれを写した本人も失敗であると考えて新しい写し紙を要求して描き直したいといったりする。すでに幼時期に正確というものについての一つの概念がすり込まれている場合がある。3才児ですでにどのように描いていいのか分からないと言ったり、うまく描けないと言ったり、失敗だと言ったりする例があった。

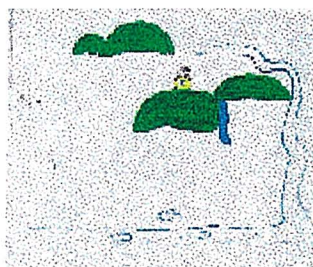
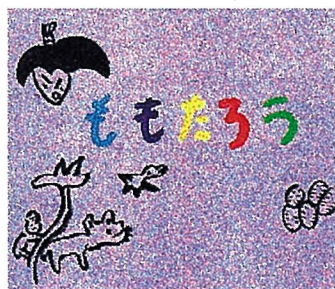
5才児がずれた線の写し絵を指差して正確であるかと問う時、対象を正確に、そのとうり写しているという意味を越えて、例えば髪の量感といった上述のように原画に含まれるもの又はそこから感じられるものの表現を為しているということで、そして本人が意識しなくともより対象の本質に迫っているということで、5才児のあの間に対し、正確であると明快に答えてあげることも可能であろう。

正確さの意味を既成の概念に囚われ一律に正確でないとはすぐ判断せず、その場の状況を考えて、逆に対象の本質に肉迫しているということで正確であると答えられるような視点は子どもたちの感性を高めていくためにも、又彼等の感性の広々とした領域やその重要さを理解するためにも大切なことであろう。

V 刺激環境から創造的環境へ

1. ももたろう

地底戦車、ロケット等幾つもの工作を長い期間に渡って徐々に手に入れた5才男児は立体回転式絵本とでもいうべきものをプレゼントしてくれた。二個の牛乳パックに6.3cm巾の三枚の紙をロールにして巻付けてある。回転していくと本人創作の物語と絵が現われてくる。それぞれの場面の絵は単純化された形態と色彩で描かれている。B 5版に模写した。タイトルの画面は原画に於ける位置を変えて構成し直したものである。



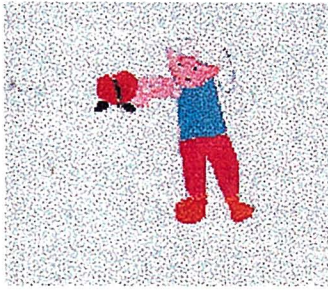
むかしとんと山という町におじいさんとおばあさんがすんでいました。

時間、距離が川の長さによって示されている。



おじいさんは山に、しばかりにいておばあさんは、かわに、せんたくしかできませんでした。

上から見下ろした視点で上下の遠近が生まれている。



おばあさんが、せんたくを
していたら、どんぶらこ
どんぶらこと、ももがなが
れてきました。こりゃあ
うまそうなももだ。おじい
さんといっしょにたべて
みよう。

やがておじいさんが かえ
ってきました。さてももを
たべるからてゆって おじ
いさんとわると

どうでしょう ももの中か
らかわいいおとこの子がう
まれました。

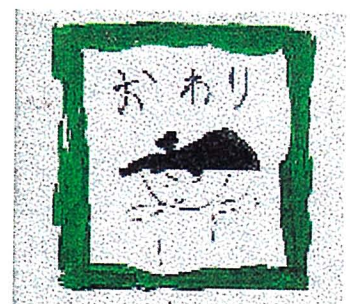


名前はももからうまれたか
らももたろうということに
しました。

おじいさん。おばあさん。
ぼくに大きなきびだんごを
三つつくってください
おにたいじにいつてくるから。
すこしいくと犬にあいました。

またすこしいくとさるに
あいました。またすこし
いくときじにあいました。
ふうふう。あとすこし
でつくぞ

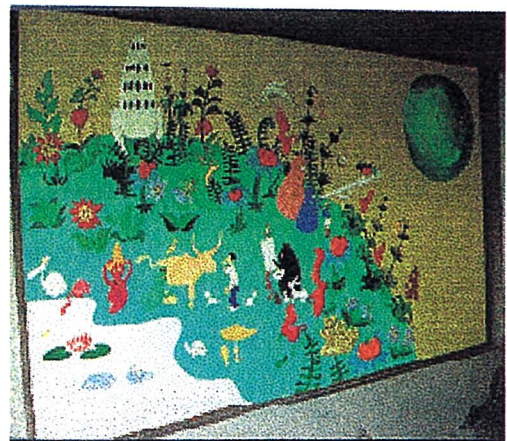
ついたぞ!! おっピアノが
ある ももたろうがピアノ
をひくとおにも出ていて
おどり出した。そしておに
にたからものをもらって
かえてきた。



原画を再現していく過程で視点の多様な位置変化、形態の大小、活力ある色彩の組み合わせ等々5才男児の対象に対する認識の深さが理解でき次第にその豊かな世界に魅せられていく。この魅力ある作品が創造される要因になった環境に注目したいものである。

2. 壁画

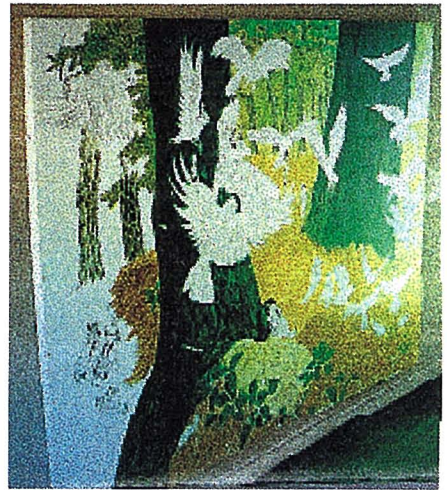
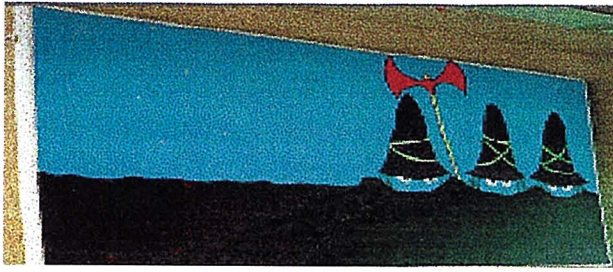
年長組と年少組との間に南北に走る巾一間ほどの通路がある。南に突き当たると玄関、その西側に年長組、東側に管理棟がある。この中央廊下の西と東の壁に約180×130cmの5枚を含めた大小9枚のパネルを設置した。まず子どもたちに人気のあるパーパーパの絵本より大空と陸地の二つの場面を選び長い期間に渡って少しづつアクリル絵の具を使って写していった。子どもたちは入れ替わり立ち替わり制作の様子を見に来て描きかけの画面について感想を述べたり制作者に色々な質問をした。とりわけ一人の4才男児が、



制作風景を見るのにとっても熱心であった。朝の登園時、教室に入るのに遠回りになるにもかかわらず母親の手を引いて一緒に絵

の前を通ってそれを見ながら入るのが常であった。制作への誘いは男児からよくあった。絵の具、筆、水入れなどの持ち運び、汚れた水変えなど頼むと喜んでやってくれた。彼のために少し高めの椅子を用意するとそこに座って静に見ている。絵も完成間近になったある日「塗ってみる？」と聞いた。この一言で彼の表情は一瞬輝き、にこにこして同意した。絵の下左隅に水面から少し頭を出しているカバを指定して塗ってもらうことにする。色はすでに小皿に溶いてあり小筆に付けて塗るだけになっている。筆を男児に渡した。彼の筆使いはとてとても慎重で輪郭線からはみだそうとはしない。その丁寧な塗り方は制作者のそれであり、いつも見ていることによって会得したのであろう。はみ出さないように塗りなさいなど一言も注文を付けていない。それにもかかわらず塗り方はしっかりと彼に伝わっているのは驚きである。下左図のカバは4才男児の塗ったそのままの貴重な左証である。また壁画は下右図が追加され、更に東の壁面にも4つの画面が登場した。

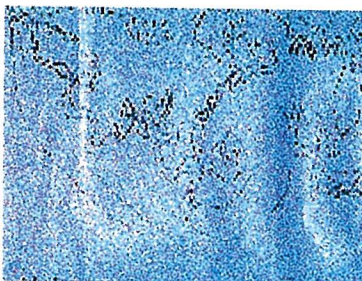




壁画の制作活動は子どもたちを絵の表現に駆り立てる。一枚の大きなパネルは子ども用にする。彼等は自由に描く。又壁画のすぐ下の通路の上に画用紙を置いて描き始める。教室で描かずわざわざこの場所にきて描くのである。制作中の場からは芸術的気分とでもいうものが辺り一面に充溢し子どもたちを豊かに包む。同時に彼等の表現への意欲が高まる。

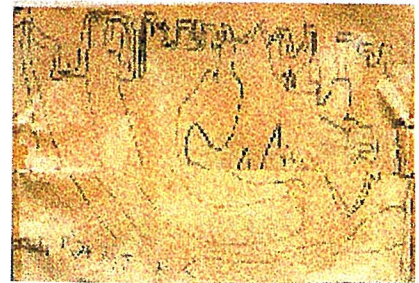
3. 美術館

2月卒園を間近に控えた5才児63名が山口県立美術館で開催中の二紀展を鑑賞した。全員に簡単な注意と鑑賞の手引きをした後玄関に整列して近くの美術館へ歩いていく。引率は園長、副園長と担任2名の4人である。入り口で二列に整列して静かに入場する。各部屋で絵の解説を聞いて徐々に移動する。目にする絵は彼等の身長の数倍もある大画面でありそれが連続していく。画面は抽象もあるが空、水、花、樹、動物、外国の建物、人々など分かり易いモチーフも多くあった。又よく描き込まれ密度のある大画面は大きな迫力を彼等に与えたようである。帰園後すぐにぼくの美術館ということで色付き画用紙を何枚も使って連続する絵を描いた男児が現われた。翌日も続きを描いて結局6枚を横に糊付け連続する絵として完成させたのである。スターとからゴールまでの迷路絵のようであるがこの表現形式は自らが体験した美術館の壁面上に次々と目の前に現われる絵の連続とも、あるいはテレビゲームの展開して進む場面の連続ともいえる。各画面には題名が付けられその言葉は詩的であり、更に使われている色画用紙の選択が内容に合っているのも驚きである。ゆきの谷は白色の、まぎらわしい草原は草色の色画用紙である。教室には好きなように選択できる画用紙棚があり彼はそこから目的に合った色を選び出してきたのである。



いなづまのうみ (左)

ちかみちさばく (右)

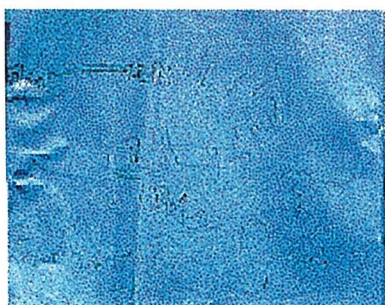




まぎらわしい
そうげん (左)



ゆきのたに (右)



こおりの
みずうみ (左)



おばけの
くさむら (右)



右図は二紀展を見て帰園後に私の美術館ということで描いた5才女兒の絵である。外国の街の風景である。赤、緑、青、黄そして赤紫などの色が活気を生み出している。迷いなく思い切りよく描かれた画面は生命感が溢れて新鮮である。色彩はいかにも外国の気分を醸し出し、形態は躍るような楽しさ感じさせてくれる。美術館へ行って絵を見るという体験がなければこれらの絵は生まれなかったに違いないであろう。

以上1. ~3. の子どもたちの活動は他から強制されて行われたものではない。子どもたち自らが進んで行った活動である。そこにはそれぞれの場面で子どもたちに対する様々な刺

絵巻物のように横に連続していく画面の中で線が形づくる形態は色画用紙の色と共鳴しつつ絵画的空間を創造している。左図は「まぎらわしいそうげん」の中央部であるが線で区切られた形が前後に重なり、ぎしぎしと音をたてて重なり合うような力を生み出している。動的で活力がある。形態は抽象であるが表現されている内容は題名通りに具体的である。どの画面の線も思いきって引かれそこに含まれている感覚は爽やかで軽快、活発で生き生きしており生命力が溢れている。



激が極く自然に用意されていたことが分かるであろう。

結 び

ここに取り上げた事例は幼児の表現のほんの一部である。彼等の表現は楽しく活動的で新鮮である。そして生命力に満ち溢れている。彼等はこれから10年、20年と更に70年、80年と生き続けて行くであろうスタート地点に位置する。たった今、人生をやり始めた瞬間であるとも言える。暗くて、不安で、恐ろしくて、やり切れなくてなどということがあってはならないであろう。生きて伸びて行くのである。彼等の表現がそのためのエネルギーに満ちているのが当然であろう又そうあらねばならない。往々にして幼児の表現を大人は未完成であるとか、でたらめであるとか、あるいはなげやりであるとか一瞬外形の相貌からすぐに価値判断を下し易い。ところが内包する中味は上昇する活発なエネルギーで溢れんばかりである。そのことを実感するために彼等の表現の過程を時間をかけて辿り表面の相貌を大人の手によって整えてみる。そうすると外形が奇麗になる。いわゆる分かりやすくなるためそこに内包しているものが誰の目にも理解可能となる。そのことを理解しようとする初めはあたかも旅人のような、辿って行く道程の初めはまるでくもの巣の絡みあいのような、分けの分からない迷路のような暗闇に立たされる。しかしやがて道がつくられ、光が差し込み論理が生まれはじめ、内包する対象の姿に会うことになる。出会えた存在は輝かしいものとなっていくまでもその人の心に残り消え去ることはない。更にそれは常に動いておりそれに出会った人と共に生きていく。幼児の表現はそれほどの重みを持っているように思われる。彼等の表現が生きていく上での力の表現でありそれに触れ得ることのできた人は幸いであるように思う。

(Septembre 18.1998)